

March 1996

文字百景

柳絮のまう町で……

文字の国・中国の活字事情
組版工学研究会・坪山一三

robundo publishing

013

地平線をみている。

あわい春の陽のなかを、綿のようなフワフワしたものが、たくさんただよっている。柳絮りゅうじゆである。古詩にいう。

桃はくれないに、柳絮はしろし。

日に照り、また風にしがう。

これは川原に自生する柳の実が熟して、綿毛のようにまって、幻想的な中国の春をうたうものである。春はもう熟しきって、大地はくろぐるとひろがっている。一片の雲をうかべた青空がつきぬけるようにたかい。ここでは大地の涯では、あわくかすんで空とつらなっている。蒼穹そうきゆうということばを思いうかべて、ただ茫茫々としている。

中国の東北部、かつて満洲とよばれた地域にきている。ふつうこの町を「ハルビン」とよぶ。漢字では「哈爾濱」で、中国音のアルファベット表記では「HARBIN」である。この発音が私にはできない。

もともと「は行」の音は東アジアの国々にとつてくせものである。日本の古代にはこのような音はなくて、せいぜい江戸時代以後のものだとされている。『古代国語の音韻に就いて』（橋本進吉 岩波書店）によると、古代の馬は「い」とないたことになっている。『万葉集』巻十二には「馬うま吉蜂よしかへ音石ねいし花蜘蛛はなぐも」と書いてあって、「馬声」は「い」にあてられている。古代でも馬は「ヒビイ

ん」とないたと思えるが、音がなければ「い」になってしまうのだろう。

考えてみれば「北京・BEIJING」「上海・SHANGHAI」の音も妙である。BEIは「PE」に転じているし、古くはHAIを発音できずに「日本海」のように「KAI」と発音したと思える。

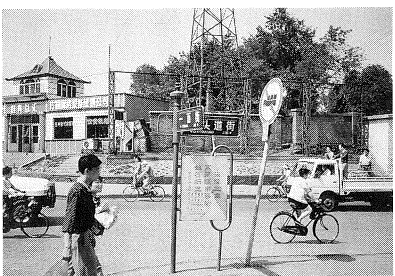
韓国の人はいまも「は行」の音は妙であって、ほとんど濁音か半濁音に転じて発音する。したがってCOFFEEは「コービー」、FAXは「バックス」と私にはきこえる。また日本の読みでは「ふさん」となる「釜山」も「プウサン」となる。同文同書の国とはいうものの、音ひとつ取ってみても随分とちがっている。

今回の旅は同行五名。私以外はコンピュータ・ソフトメーカーの社長たちである。ご存知ないかもしれないが、すでに日本のソフト製作の相当部分が外国に発注されていて、外国人が日本向けのソフトを作っている。この町にも、日本の「イースト」というソフト・メーカーと、黒龍江大学との合弁会社の「黒龍江伊思特信息技术有限公司」がある。そもそも国立の大学と、日本の民間会社とが合弁会社をつくるということが理解しにくい。しかも私の通訳してくれた黒龍江大学助教授の王利光氏は、この会社の副総計理（専務格）だし、オフィスも大学のキャンパスの真っ只中にある。社会制度の違いとしかいえないのだろうか。

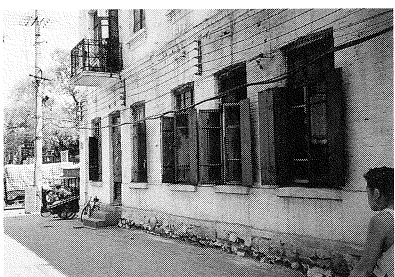
この旅の目的は、中国にある金属活字などの文字原形を調査することにあつた。事前に黒龍江大学のスタッフが来日して、「ハルビンでは鉛に字を直接彫っている」ときかされた。私はそれを、先進諸国ですたれてしまった金属活字製造技法の、直刻父型（パンチカッティング）だと勝手に



1



2



3

- 1 黒龍江イースト・ソフト技術の本社ビル。まったくの大学のキャンパスのなかにある。
- 2 ハルビン市一面街周辺。再開発地域になっているため、古い建物はほとんど取りこわされている。
- 3 一面街の一角、石頭通りは再開発寸前の奇妙な静けさがある。日本時代の建物である。

03

想像して、この旅行を積極的にきめたのである。

レクチャーや打合せで忙しいソフト・メーカーの社長とは別に、私は印刷史を研究しているという李春岩氏と王氏と三人で、ハルビンの町を駆けまわった。

04

移動の車中は楽しい語らいの場となる。李氏は熱心に日本の印刷界の状況を質問してくる。王氏は新潟大学に留学して理学博士号までとった人だという。完べきな日本語を彼は使う。「王先生」も、「李先生」も、こころのやさしい人たちであった。

「まあ、もう一度エクササイズです。あなたの発音はだめですよ。HARBIN」

013

「HARUPBIN」

と私。しかし私は眸のはしにすっかり「侵華日軍七三一部隊罪証陳列館」という、黒変体ふうの文字で書かれた看板をとらえていた。この地域には、苛酷な戦争の爪跡がいまも生々しく残っている。黒龍江は中国とロシアの国境をなす大河で、その支流の松花江スンガリにそってハルビンの町はひろがっている。冬は極寒の地となるが、五月下旬のこの頃は、まさに薫風というおだやかな風が吹いていて、鈴懸けの木が路傍に天をついて連なっている。

013

黒龍江印刷廠、ハルビン工業大学印刷廠、黒龍江大学印刷廠、ハルビン印刷材料廠（廠は工場の意）などがおもな見学地であった。すべて国营企業であり、従業員は国家公務員ということになるわけだが、勤労意欲はあまり高いとはいえない。一部のエリートの高揚感や能弁さと、普通の労働者との落差はあまりに大きすぎた。また大学に併設されているとはいっても、学内の資料・

文献だけではなく、いわゆる商業印刷めいたものも印刷していて、社会制度のちがいをまた意識させられる。

この町の印刷業界の状況は、少々あらく表現すれば、東京の一九六〇年代中頃の状態に近い。ここではまだ活字版印刷が主流で、写植機はみななかったし、平版印刷機は単色のものがおおい。

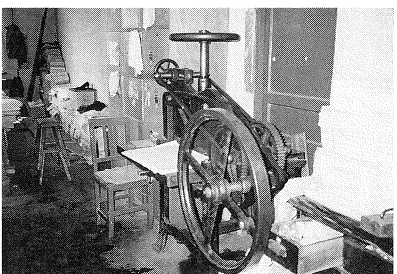
印刷用紙の品質も悪くて、書籍の本文用紙は、日本の中質紙よりも大分品質がわるい。そして多色刷り用のアート紙などの塗工紙は、ほとんど日本や韓国からの輸入品である。印刷機や、関連する諸機器のたぐいは、ほとんどハルビン印刷設備廠の製造による独自のものが使われているが、いずれも年式は相当古いものがおおい。

単色の手ざしの印刷機や、アオリ式の古めかしい印刷機が大いばりで稼働しているかと思うと、最新のヘル社製スキヤナーや、ローランドやハイデルの自動四色機が導入されていて、自慢気に説明されたりする。組版は金属活字版が大半をしめるが、この町ではむしろ、光学式写植を素通りして、デジタル式組版機が数多く稼働している。この町でも、さまざまなヒズミをかかえながらも、改革・開放のかけ声のもとで、急変する中国の姿がみられる。

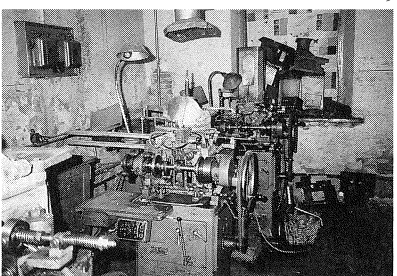
哈爾濱印刷材料廠は、ハルビン市道里区石頭道街十号にあった。この会社はもともと日本人の設立による。昭和十年代に日本の満洲進出とともに、凸版印刷が増大する印刷需要に 대응べくこの町に進出していた。それに追従して、活字鑄造・印刷材料・機器一式を受注したのは、古賀和佐雄氏ひきいる「千代田印刷機材料製造株式会社」（現・千代田マシナリー）であった。



4



5



7

06

013

013

4 ハルビン印刷材料工場の入口。

5 古いギロチン（断裁機）。まだ現役で使われていた。

6 日本製であることがわかるネーム・プレート。

7 自動活字鑄造機。十数台が騒音をたてながら稼働しているのを見ると、まだこの町では活字が元気だなと思う。



6

昭和七年三月一日には、日本軍部の後押しで満洲国の建国宣言が行われた。新天地に不況打開の活路を求めようとして、わが国の企業が満洲をはじめ大陸各地に進出した。大手印刷会社も進出をはじめた。

満洲国政府は国定教科書などの印刷のため、印刷局を新設したが、これをつくるとき、印刷機械などの設備は、千代田印刷機材料製造が一手に引き受けた。なにしろ活字から大型機械の据え付けまで、一切をととのえるのだから、たいへんな事業であった。古賀は入札に成功すると、資金、資材の投入から技術者の派遣などで、東京と満洲の間を何度も往復し、無事に大任を果たした。これは千代田の技術と信用を高めるのに、大きく役立った。満洲はもともと中国の一部であるが、四千年の歴史をもつ中国は文字の国でもあり、日常使用する漢字が多いために、母型づくりは多忙を極めた。『古賀和佐雄・その人と千代田印刷機製造の六十年』（三浦康編集 同社刊）

このとき古賀氏が満洲での足場とし、その後、活字鑄造所として稼働していたのがこの会社で、日本人がおおく住んでいた一面街の一面に設けられた。日本の印刷界の古老によると「三三書局」とよんでいたというが、現地の人にはなしでは「三三鉛字局」とか、「第三工具工場」とよんでいたという。このあたりは再開発地域になっていて、九十六年の春には取りこわされるということであった。

余談であるが、英語の *Movable Type* を日本では、稼働性に注目して「活字」と呼んでいる。中

国ではむしろ素材に注目して「鉛字」と訳している。もともと陶製、銅製、木製などの「活字」は、むしろ東アジアの国々にのほうが歴史はふるく、中国でも「活字・活字版」とよんでいたらしいが、

活字版之名不雅馴 因以聚珍名之

活字版という名は、文章の字句が正しくて穏当なもの（雅馴）ではない。したがってこれを聚珍しゅうしんと名づけた。

という記録が清代の中国にある。日本でも「活字版・一字版・木活字版」などと江戸期でもよばれていた。しかしいまも中国の人は「活字」ということばは適当でないと考えているらしく、金属活字を「鉛字」とよび、デジタル・フォントを「電字」とよんでいる。このほうがある意味でわかりやすくもある。

その「電字」によるワープロがさかんに用いられている。入力方式が面白い。主流は「五筆字型」という方式で、他に「四角号馬式・併音式・部首式」などがある。「五筆字型式」は「四角号馬式」から発展したもので、文字が読めなくても採字でき、記号化にすぐれたものであった。わが国の「仮名・漢字変換式」よりも私には面白かった。日本のワープロの開発者たちも、ぜひ研究してほしい入力方式と思えた。

さて、ハルビン印刷材料廠である。建物は白いペンキが何度もあつく塗るかさねられているが、屋根のかたちなどは、明らかに日本式であった。取扱品目は「鉛字」やインキ、ローラーなどで

書体名 大初号(45ボ) 初号(42ボ) 小初号(36ボ) 一号(27.75ボ) 二号(21ボ) 三号(15.75ボ)

隷書体

春 河 歌

(×48ボ)
4595字

(×36ボ)
4595字

(×31.5ボ)
4595字

新魏体

字

4050字

猷

4050字

希

4050字

黒変体

室

(×31.5ボ)
4234字

活

(×21ボ)
4109字

扁傘体

勤 基 欲

(×42ボ)
2534字

(×31.5ボ)
3814字

(×21ボ)
3345字

長傘体

柳

(×36ボ)
4128字

眼

(×21ボ)
4128字

副

(×18ボ)
4128字

事

(×12ボ)
4128字

扁黒体

像 兼 流

(×36ボ)
2534字

(×31.5ボ)
3814字

(×21ボ)
3345字

宋黒体

路

4128字

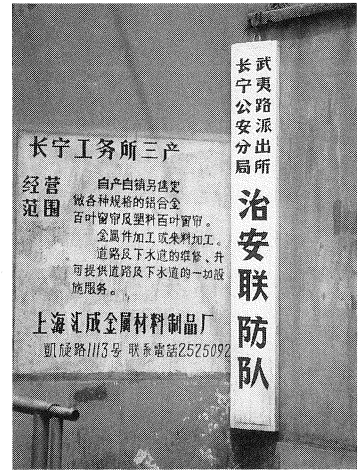
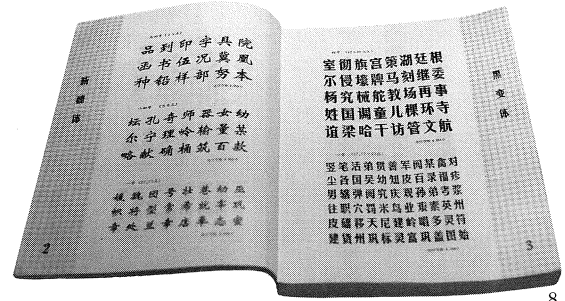
福

4128字

9 アイディアの源泉とみるか……。



8 ハルビン印刷材料工場の活字の書体見本帳。



書体名 初号(42ボ) 小初号(36ボ) 一号(27.75ボ) 二号(21ボ) 三号(15.75ボ)

宋体

然年数案 徐延
4098字 4800字 6250字 6480字 6480字

正楷体

悠都来保
6276字 7221字 7834字

仿宋体

所凝冲
3759字 3926字

長仿宋体

特就希
(×13.875ボ) (×12ボ)
6947字 7050字

黒体

就秘会毅博青
4055字 4121字 6845字 6241字 6405字

小姚体

照媛
(×21ボ) (×18ボ)
4050字 4050字

長老宋体

福
(×21ボ)
6196字

四号(13.875ボ) 小四号(12ボ) 五号(10.5ボ) 小五号(9ボ) 六号(7.875ボ) 七号(5.25ボ)

床超号状爪青奢励募爆参乾以必于
7300字 6840字 7300字 7060字 7210字 7300字

投息言表崇兹奎
7834字 7377字 7060字

路燥矢白
7300字 7873字

秦映昨
(×7.875ボ)
7050字

特点单像采迄群彬高稼筋摘
7300字 6408字 7300字 6408字 7200字

書体名 (72ボ 他)

日歴字

八初
2500字

ある。工場の片隅に「ギロチン（断裁機）」があった。ふるびてはいるが現役で稼働している。プレートを確認すると、年式の記入はないものの、千代田の特長ある「瓢箪」のマークと「CHIYODA Mikawacho Kanda Tokyo」とあった。五十年の風雪に耐えた機械のおもみが、ズツシリとした手ごたえで工場の一隅をしめている。工場いっばいにハルビン印刷設備廠製の「自動鉛字製造機」が十二台ならんで、さかんに鉛字を鑄造していた。同社では「鉛字」というタイトルでB五判百七十八ページの書体カタログを発行している。しばらくそれに注目してみよう。隷書体・三サイズあるが、あきらかに、筆法のちがう書家の手になる。一号はややバランスを失っているし、傾きが不統一なのが気になる。二号は肉厚なすわりのよい字である。新魏体・魏碑体ともいい、鮮卑族など、西方の異民族の書法から発したため、なかなかこの国の人に理解されないが、私はこの書法にすでにサンセリフ体への萌芽をみていて注目している。

黒変体・中国、とくに海岸部の人がポスターなどの見出し文字としてこのむ書体である。字種も結構多い。この書法もなかなか日本人はうけいれようとしめない。それは多分、この書法がまだ成立してから新しいためであろうか。文革時代にはこの書法が町にあふれていた。

扁牟体・長牟体・牟は大きい意。たて・よこそれぞれ二割ほど変形させた見出し用明朝体のこと。扁黒体はゴシック体の平体変形鉛字である。

宋黒体・宋体は日本では明朝体のことであり、「黒」は太いことを表すが、日本の特太明朝体はたて画が太くなるのここではよこ画が太い。ウロコの形状がちがうが、ナウMシリーズに近い印

象がある。

宋体・日本での明朝体と同じ。四号から下のサイズでは字種も多いが、サイズごとに書風はかなり相異している。小初号はキレのよい明解な書風だが、重心が高くて横組みには適さないようだ。書風としては三号の七千三百字に安定感があるが、太さのバラツキが多いし、やはり横組み適正は低い。この鑄造所の宋体はベントンなどの機械彫刻機ではなく、直刻式とみえて、サイズごとに書風、字体、字種が微妙にことなっている。さらに特長的なことは、縦組み主流と考えられているため、字画の重心が高い位置に設定されていることである。これは縦横併用式明朝活字になれてしまった私の造形眼には、安定感のないものにみえてしまう。またサイズが小さい活字ほど、いわゆる「ふところ」がひろいことである。これは両仮名を混ぜて用いるわが国と、漢字だけを使用するかの国の造形論のちがいがから発するが、私の眼には、中国の宋体（明朝体）は、いささか「ゆるく」みえてくる。もちろんこれは優劣を論じるものではなく、百三十年ほどの金属活字の歴史のなかで、彼我がそれぞれ工夫して獲得した書体理論から生じたものであるう。

正楷体・さすがに書の国だけあって、字面はこぶりながら、伸びやかで、すずやかな書風には、ほれぼれとさせるものがある。わが国の筆文字系活字は、なんとなく正方形の枠にとらわれて、大らかさと筆の速度を失ったものがおおい。昭和初期に日本が持帰った活字の代表が、この書体と仿宋体（宋朝体）であったというもうなずける。この書風にちかいは、戦前の津田三省堂正楷書体、川口印刷（図書印刷の前身）の正楷二号などがある。現在よく使われているモトヤの

正楷書体とはだいぶ表情がちがう。

仿宋体・長宋体…この書風による活字こそ、清朝末期から民国初期の中国が完成した、もっとも安定感があつて、鮮烈で、好まれた印刷用書体である。その五号は全字種七千八百七十三字という最大字種であることをみても、この書風がいかに彼の国で重く用いられたかがわかる。かの国では正方形の書風がこのまれのたいし、わが国ではむしろ長体のもの（長仿宋・長宋朝体）にエキゾチズムをいだいて、上海に名刺や用箋を発売する好事家もおおかつたという。この書風の活字の導入者は、昭和初期の名古屋・津田三省堂であるが、現在も発売されている金属活字は、同社が戦争によつてり災したため、戦後石井茂吉氏の原字にもとずいて再刻したものである。

黒体…この国のゴシック体である。一号と小四号の書風は明解でよいが、ほかの号数は重心・濃度に問題がおおい。全体に設計思想がふるく、全面改刻の必要性がある。

小姚体・長老宋…「姚」には「みめよい・うるわしい」の意があり、「老」には「よい・美しい」とこしえに」の意がある。黒変体の小さいサイズともいえるが、二号までしかサイズがないのを見ると、やはり見出し用書体として扱われているようである。学生運動がはなやかなころ、この書法による看板をよくキャンパスでみたものであったが、中国ではいまも手描き看板などでは、とてもよくみる書法なのに、この国ではこのまれないのはなぜであろう。

日歴字…日本統治時代に残した母型である。七十二ポイントの楷書体は、顔真卿の書風をまねたものとみられ、雄渾でのびやかな筆勢の字と思つたが、現地の人の評価はきわめて低かつた。こ

の活字は、私の知るかぎり戦前・戦後のわが国の活字ではみていない。またひら仮名・カタ仮名も全字種あつて、ちようど鑄造されていた。持帰つて調べてみたら、意外に新しいもので、多分日本活字社の母型によるものかと思われた。

現地に入つてわかつたのであるが、この鉛字鑄造所の母型は、ほとんど上海からのもので、直刻父型をつくつていてという情報は、ヘンやつくりをあわせてつくる「作字」の誤りであつた。最後に中国における活字において、特長的なことをすこし書きとめておきたい。

一、ゴシック体活字の原型はもしかすると日本製のものともみられ、ふるくて、改刻もほとんど実施されていないようである。また丸ゴシックもなく、台湾で見られるようなゴナ系・ナール系など新しいゴシック系列への展開もみられない。なによりもゴシック体の需要・評価はおどろくほど低い。

二、新魏体という活字に注目したい。いわゆる北朝系書法から発した、北魏の方筆派のような活字である。この活字は評価が高く、見出し用として、むしろゴシック体よりこのんで用いられている。敦煌発見の「勝鬘義記」(北魏・正始元年 五〇四)に関して、西川寧氏が「龍門二十品」とともに、高い評価をあたえていたことを思いだした。横画の間隔をせばめて、胴体をひきしめ、構成をきびしくしたこの楷法の基本的書風を、もう少しまなぶ必要があるとおもう。本来、ノミで切りだし、彫りおこしたこれらの方筆派の書法こそ、金属活字には適

したはずである。

三、黒変体・小姚体・長老体などが、やはり気になった。看板にしる、印刷用見出し活字にせよ、かの国ではこの書法をこのんで用いる。よくみるとタテ長の、モダンないしはトランジショナル・セリフ系の書法ともいえ、明朝体（宋体）とのあい性は、ゴシック体よりある意味でよいことが判明する。日本でゴシック系書体の開発にむかった労力の、相当部分が、中国ではこの系列の書法にむかっている。しかし横組み適性に難がありそうで、中国でも新聞などで横組みがふえつつある状況を反映して、電算写植ではゴシック系に追われつつあるともみえる。

四、宋朝体（仿宋体）の評価がとて高く、明朝体（宋体）の評価が低いことにおどろかされる。一般に明朝体は「印刷体」とよばれ、「書の国」中国での評価はどうしても低くなるのだろうか。しかし近頃は、やはり日本などの影響もあり、逆転現象もみられるようである。それでも、まだまだ文学や、本格的書籍には宋朝体をこのむ気風が教養人のあいだにはみうけられた。参考までに毛沢東選集や毛沢東語録などは、この活字による組版であって、明朝体ではなかった。かつて昭和初期の日本では、一種の大陸趣味風のエキゾチズムとして、明朝体ではなかった。これからは、本格的オールド・チャイナ体としてこの書体を認識して、この国の書体デザイナーにも挑戦してもらいたいと念願しているが、本音ではいささか無理かなとも思っている。この書法をみていると、明朝体までは中国についていけても、とうていこの深みの

勝鬘義記一巻

10



10 方筆派の書法参考図。

勝鬘義記（北魏・正始元年・五〇四）敦煌文書である。

始平公造像記（北魏・太和22年・四九八）龍門二十品。

ある書法をこなすことはむずかしそうにみえてくる。漢字はやはり中国の文字であって、秋津島の日本の文字ではないという、あきらめにもいた気持をさそうものがある。

五、一九五六年の「漢字簡化方案」による、いわゆる簡化文字は、およそ千百五十文字である。しかし今日の日中間の字体の解釈には相当のひらきがみとめられ、「宋体字母発注表」での確認によれば、少なくともみてもよそ二千五百字が、多くみて三千五百字ほどに、字体の差異がみとめられた。また漢字だけのかの国と、両仮名をもちいているわが国とでは、文字の重心設定と、空間把握を中心として、造形解釈に大きな差があることもわかった。戦中・戦後のおよそ五十年ほどの印刷業界の断絶は、両国の近代印刷史のほぼ半分を意味しており、彼我の印刷用書体には相当の差が生じたことであろう。したがって昭和初期に、楷書体や宋朝体をもたらししたような導入には相当の無理がある。むしろこれからは日中の書体デザイナーが手をたずさえて、それぞれの得意分野の書体を確認しながら、字体も調整しつつ、相互供給の可能性もふくめて、新しい書体を開発すべきだと考える。俗諺には「モチはモチ屋」とあり、「やはり野におけレンゲ草」という。

published: robundo publishing inc.
edited: nagari junji
shot: shin hidetoshi
basic design: shiroi yoshitaka
typesetting: tpe comique

朗文堂 160 東京都新宿区新宿2-4-9
telephone 03 3352 5070 facsimile 03 3352 5859

March 1996

013

文字の国

柳絮のまう町で……

文字の国・中国の活字事情
組版工学研究会・坪山一三

robundo publishing

013